

柳 宗悦の民芸論 (XXIII)

— E・S・モース —

八 田 善 穂

目 次

- (1) モースと日本
- (2) モース・コレクション (陶器)
- (3) モース・コレクション (民具)
- (4) フィラデルフィア万博
- (5) 『日本のすまい』

柳¹⁾ は昭和4～5年の欧米旅行²⁾ 中に、大阪毎日新聞京都版に通信を寄稿している。³⁾ その中に次のような個所がある。

「ワシントンのFreer gallery⁴⁾ はなかなかよかった。……日本のものが特に光ってゐるので力強い。……Freerは明治の初めに日本へ来た人で、相当の眼を有つてゐた人と思ふ。この点Morse等より優れてゐる。⁵⁾」

また『越後タイムス』にも知友に送った便りが掲載されている⁶⁾。その中では次のように述べられている。

「ボストン・ミュウゼアムの有名なモールス・コレクションを利用して、「朝鮮系日本民窯」を調べて帰りたいと思ふのです。之は未知の領域であつ

-
- 1) 柳宗悦 (1889 (明治22) - 1961 (昭和36))。
 - 2) ハーヴァード大学での講義のため昭和4年の4月に出発し、ヨーロッパを回った後米国に渡った。10月から講義をし、昭和5年7月に帰国した。
 - 3) 「欧米通信」筑摩書房版全集 (以下「全集」と略記する) 第5巻「ブレイクとホケットマン」 (以下「第5巻」と略記する) 所収。
 - 4) Smithsonian Institution, Freer Gallery of Art. Charles Freer (1856-1919) の創設になる東洋美術専門の美術館。
 - 5) 全集第5巻 P376。
 - 6) 「『越後タイムス』欧米通信」全集第5巻所収。

て、而も大した領域だと云ふのが小生の考へなのです。⁷⁾」

ここに登場するMorse（モース）は東京の大森貝塚を発見したことで知られるモース⁸⁾である。モースは海洋生物学者、博物学者であると同時に、日本文化の熱心な愛好者であった。

本稿は明治初期の日本におけるモースの活動とコレクションの内容を概観し、後の柳の活動との比較を試みようとするものである。

（1）モースと日本

若いころのモースは貝類の収集家として知られていた。1867年には友人と共に博物学の専門誌『アメリカン・ナチュラリスト』を創刊し、同年同じメンバーによりマサチューセッツ州セイラム（Salem）にピーボディー（Peabody）科学アカデミー（後のセイラム・ピーボディー博物館、現ピーボディー・エセックス博物館）を創設している。1876年にはアメリカ科学振興協会副会長に選ばれた。

このころモースは、腕足類の研究に打ち込んでいた。腕足類とは触手動物の一種で、二枚貝に似ているが別種のものである。シャミセンガイ、ホウズキガイなどがこれに属する。しかしアメリカの東海岸には腕足類が乏しいために、研究は困難であった。そのようなとき、モースは日本には腕足類が多いとの情報を得た。そこで彼は資金を工面し、1877年5月、日本へ向かった。

モースが横浜に着いたのは明治10年（1877）6月17日であった。2日後の19日、彼は汽車で東京へ向かった。大森貝塚の発見はこのときのできごとである。

この日は同時に、もうひとつの重大なできごとがあった。新橋に彼を迎えに出た東大教授外山正一⁹⁾からの、東大の動物学教授への就任依頼である。東大

7) 全集第5巻 P385。

8) Edward Sylrester Morse(1838-1925)。なお、本稿の表記は通例に従い「モース」とする（一部引用部分を除く）。

9) 1848（嘉永1）-1900（明治33）。

はこの年の4月に発足したばかりで、動物学の教授は未定であった。外山はアメリカでモースの講演を聞いたことがあり、彼の名声を知っていた。そこで折よくモースを推薦したようである。

契約は同年7月12日から2年間、月給は350円であった。御雇い教師モースの誕生である。当時は各官庁の大臣・次官級の月給が300～400円、東大の日本人教授が100円程度であったという。

モースは早速、江ノ島の漁師の納屋を改造して日本初の臨海研究施設を作り、動物標本を収集した。また9月からは大森貝塚の発掘に着手した。この発掘は日本における近代的な考古学および人類学の幕あけとなる。ちなみに「縄文土器」の語は、モースが用いた“cord marked pottery”に由来する。

明治10年（1877）11月、モースは一時帰国する。このとき彼は東大から、物理学と政治学の教授を探してくるよう依頼を受けた。これに応じて政治学教授として来日したのがフェノロサ¹⁰⁾である。

翌11年4月、家族と共に再来日したモースは夏休みに東北・北海道へと旅行する。そして秋には、進化論の講義をしている。このころから彼は日本の民具と共に、陶器の収集を開始し、陶器については当時の第一人者蛭川式胤¹¹⁾の指導を受けている。

明治12年（1879）5月からは瀬戸内海から九州へと旅行し、秋に帰国、翌1880年（明治13）からはピーボディー科学アカデミーの館長となり、以後36年にわたってこの職を勤め、ここを日本の民族学資料の拠点とする。明治15年（1882）6月から16年2月にかけて、彼は三たび日本を訪れる。陶器・民具の収集が目的であった。この時は関西から瀬戸内海へと足を延ばしている。

これ以後、モースは来日しなかったが、明治19年（1886）には『日本のすまい』¹²⁾が出版され、大正6年（1917）には滞日中の日記『日本その日その日』¹³⁾が発表された。これらの著作には多くのスケッチが添えられている。なお、明

10) Ernest Francisco Fenollosa (1853-1908)

11) 1835（天保6）-1882（明治15）。

12) “Japanese Homes and their Surroundings”。

13) “Japan Day by Day” 邦訳平凡社東洋文庫。

治31年（1898）には勲三等旭日章，大正11年（1922）には勲二等瑞宝章が授与されている。

大正12年（1923）9月1日の関東大震災により，東京帝大図書館の蔵書もすべて失われた。これを聞いたモースは自分の科学関係の蔵書1万2千冊をすべて東大に寄贈したという。

以上が日本との関係を中心にしたモースの略伝である。¹⁴⁾

（2）モース・コレクション（陶器）

モース・コレクションには2つのグループがある。ひとつはボストン美術館の陶磁器コレクションであり，もうひとつはセイラムのピーボディー・エセックス博物館に所蔵される民具コレクションである。前者は約5千点，後者は約3万点という膨大なものである。いずれもその一部がこれまでに日本で公開されている¹⁵⁾が，本稿の冒頭に揚げた柳の文にあるのは前者である。そこで前者から見ていくことにする。

1990年（平成2）の9月から12月にかけて，大阪の国立民族学博物館において，「海を渡った明治の民具——モース・コレクション展」が開かれ，その期間中に，次のような連続講演会が開催された。

9月15日 ピーター・フェチコ¹⁶⁾（セイラム・ピーボディー博物館館長）
「セイラム・ピーボディー博物館とその揺籃期」

14) 以上の内容は図録『モース・コレクション』（国立民族博物館，1990）の解説（pp.10—24）「エドワード・S・モース」（磯野直秀）に依る。

15) 巡回展「日本の陶磁展」（東京他，1980—81）

モース・コレクション写真展「百年前の日本展」（小学館，1984）

「モース・コレクション，KANBAN展」（小学館・高島屋，1984）

巡回展「モースの見た日本展」（小学館，1989）

「ピーボディー博物館収蔵根付展」（東京・大田区立郷土博物館，1989）

「海を渡った明治の民具——モース・コレクション展」（大阪・国立民族博物館，1990）

「モースのみた江戸東京展」（東京都主催，1991）

16) Peter J. Fetchko (1943—)

1 2007年3月 八田善穂：柳 宗悦の民芸論（XXIII）

ジョン・セイヤー¹⁷⁾（セイラム・ピーボディー博物館研究員）

「モースの偉大さ」

9月22日 佐原 眞¹⁸⁾（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）

「モースの考古学と民族学」

10月6日 磯野直秀¹⁹⁾（慶応義塾大学教授）

「日本におけるモース」

10月20日 祖父江孝男²⁰⁾（放送大学教授，国立民族博物館名誉教授）

「モースの時代——明治初期の日本と日本人」

11月17日 守屋 毅²¹⁾（国立民族学博物館教授）

「なぜいまモースなのか——博物学の過去・現在・未来」

12月1日 小木新造²²⁾（江戸東京歴史財団理事）

「モースと江戸・東京」

この講演録は1992年（平成4）に『モースの贈り物』と題して小学館より出版された。

この中の佐原 眞「モースの考古学と民族学」に次のようなくだりがある。

「彼（モース）が三度目に日本にやってきたのは、……アカデミーのために日本の民具を集めることが目的でした。しかし，民族学博物館の守屋毅さんは，それは表むきの理由で，本当は彼は個人的に日本の陶器を集めたかったからだとおっしゃっています。そうかもしれません。

ところで，その民具という言葉ですが，皆さんおなじみになっているかもしれないけれど，この言葉が使われはじめたのは，そんなに古いことではありません。1925年に柳宗悦が『雑器の美』というエッセイを書いております。柳は

17) John E. Thayer III (1923-90)。

18) 1932 (昭和7) -。

19) 1936 (昭和11) -。

20) 1926 (大正15) -。

21) 1943 (昭和18) -1991 (平成3)

22) 1924 (大正13) -。

「雑器」という言葉のほうを好んだのです。しかし、「民具」という言葉も使っております。雑器というのは一般民衆が用いる雑具のことだから、それを民具と呼んでもいいと言っています。²³⁾けれども、柳自身はもっぱら雑器という言葉を使い続けます。

その柳はまた、「民芸」という言葉を造語します。この「民芸」の「民」は「民衆」の「民」です。その民衆品と貴族品とは対比され、美術品に対しては工芸品が対比される、ということから「民芸」という言葉を生み出すわけです。しかし彼は、民間で用いる日常のものという意味では、もっぱら「雑器」という言葉を使っています。民具という言葉は、このころにはまだ一般化していませんでした。

「民具」という言葉がひろがるのは1933年ごろのことだそうです。今から57、8年前、民族学者であった渋沢敬三さん²⁴⁾が使われるようになってからということ。その言葉の意味は、日常生活で使う品であります。²⁵⁾……

さて、「民芸」を愛した柳宗悦は、しかし一般民衆の日常の生活で使われているものを全部集めたわけではなかったのです。民衆が使っているものの中でも、彼の目で美しいもの、美しくないものは区別しているわけです。だから、彼の目に美しいものとして映ったものが、民芸ということで集められたわけでは

その柳からさらに50年前、つまり今からほぼ100年前にモールスが集めたものには、美しくもなんともないものがたくさんあります。ですから、ピーボディー博物館の歴史を著したホワイト・ヒルという人は、モールスには審美眼がなかったと書いています。つまり彼は美しさがわからなかったということです。そうしますと、柳宗悦さんは美しさがわかったから、民衆が使っているも

23) 全集第8巻「工藝の道」P.16参照

24) 1896(明治29) - 1963(昭和38)。

25) 拙稿「柳宗悦の民芸論(V) - 民具と民芸 -」(「徳山大学論叢第28号」1987所収)および「柳宗悦の民芸論(XI) - 民具研究の方法 -」(「徳山大学論叢第34号」1990所収)(徳山大学研究叢書25『柳宗悦研究 - 民芸の美学 -』(平成14年)第九章および第十章)参照。

の中からは美しいものを選ぶのだけれど、モールズさんは、その50年前に、美しさがわからなかったからすべてを集めたのだということになります。

私は、しかし、それは違うと思う。なぜ彼がすべてを集めたかということ、それはモールズさんが博物学者だったからだと思います。一步譲って、彼には審美眼がなかったとします。仮にそうだとすると、モールズさんが、みずからは日本の美術品を意図的に集めなかったということは確かです。……

私はモールズさんは博物学者だったからこそ、すべてを集めた、そう思います。それは彼が集めた日本の陶器についても言えます。

……

……彼がたくさん集めた陶器類は、現在、ボストン美術館の倉庫に収納されています。彼が分類したままの状態です。これも面白い。それにいろんな陶器類、とくにちょっといい陶器類は箱に入っていて、箱書きなどが書いてあるのが普通です。その箱を全部捨ててしまって、陶器は陶器として分類してしまっています。そして立派な日本陶器のカタログを出版しました。²⁶⁾

このモールズさんが集めた陶器類は、いったいどういう価値をもっているのでしょうか。モールズさんが集めた日本陶器は、ボストン美術館のほか、東京大学にも少数ですがあります。陶磁史の研究で有名な小山富士夫さん²⁷⁾が、それらはガラクタばかりでがっかりしたと書いています。また陶磁史の研究者である林屋晴三さんが、ボストン美術館にあるモールズの集めた陶器を見たときに、「私にとってはよい感興をいだかせる存在ではなかった」と、つまり感動しなかったと書いています。やはり陶磁史をやってらっしゃる中ノ堂一信さんにもお尋ねしましたがけれども、モールズの集めた陶器の中には鑑賞をたえるものはごくわずかしかないとのことでした。

これはどういうことでしょうか。モールズには審美眼がなかったのではなくて、彼は芸術的には高貴な美は追わなかったということです。彼が追ったのは、日常茶飯の暮らしで生きている器だったわけです。日本陶磁史の研究はもっぱ

26) “Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery” (1901) (1979再刊)。

27) 1900 (明治33) - 1975 (昭和50)。

ら芸術的な美を追究してきました。いいものばかりを集めた。だから、江戸の終わりから明治にかけて、一般家庭で使われていたような食器は日本には残っていないわけです。しかし、モースはそれを集めてアメリカへ持って帰った。だから、その時代の陶器の全部を研究するうえでは、モースの集めたものを見ないと研究が進まないという状況に追い込まれているわけです²⁸⁾。」

「モース・コレクション展」の図録²⁹⁾においても、磯野直秀氏が³⁰⁾が次のように述べている。

「このコレクションには「つまらない」品が多く、逸品は少ないとけなす専門家もいるが、その点にこそ彼の収集の特徴があるように思われる。

収集には二つの道がある。一つは美術品として逸品をそろえるもので、普通のコレクションの大半はこちらだろう。いま一つは、陶器なら陶器を民族学的資料としてとらえて体系的収集をめざすもの。モースのねらいは后者で、したがって彼は、美術的に価値の高いものだけでなく、美術家には「つまらない」品も庶民が日常的に用いていた品も差別なく収集分類して、日本陶器の全体像を把握しようとしたのではないか。³¹⁾」

本稿冒頭の柳の文中で、柳がフリーアーをモースより優れているとしているのは、コレクションに対するモースの上述のような姿勢によるものであろう。

モースの陶器コレクションがボストン美術館に所蔵されるに至った経緯は次の通りである。

「同じ年（1886年）、彼はアメリカ科学振興協会（AAAS）の会長に選出され、翌年その特典でヨーロッパへ渡った。つづいて、88年、89年にも渡欧しているが、その目的はヨーロッパに流出した日本陶器の研究と収集であった。もちろん日本からも入手を続けた。こうしてセイラムの自宅は陶器で埋まり、借金もかさむ一方になった。ついに、モースは1890年、陶器コレクションをボストン美術館にゆずり、その代金7万5000ドルで長年の借金からやっと解放され

28) 『モースの贈り物』, PP.209-212。

29) 注14) 参照。

30) 注19) 参照。

31) 『モース・コレクション』, P.18。

た。その後、同館の日本陶器管理人を兼ね、1901年（明治34）に『日本陶器モース・コレクション目録』を刊行している。³²⁾」

1980年（昭和55）から81年（昭和56）にかけて、東京をはじめ名古屋、仙台など全国6個所で「ボストン美術館所蔵モースコレクション 日本の陶磁展」が開催された。このときの図録には175点が掲載されている。その内訳は次の通りである。

信楽焼（2点）、備前焼（5点）、丹波焼（6点）、瀬戸焼（13点）、美濃焼（12点）、唐津焼（11点）、伊万里焼（1点）、高取焼（4点）、上野焼（3点）、八代焼（1点）、高田焼（3点）、小代焼（1点）、薩摩焼（8点）、対馬焼（1点）、柳原焼（1点）、萩焼（4点）、岩国焼（1点）、楽山焼（1点）、布志名焼（2点）、高松焼（2点）、讃窯（1点）、志度焼（4点）、淡路焼（1点）、安東焼（1点）、瑞芝焼（1点）、偕楽園焼（2点）、男山焼（2点）、赤城焼（1点）、湊焼（1点）、赤膚焼（1点）、膳所焼（1点）、湖東焼（2点）、吸坂焼（1点）、九谷焼（8点）、大樋焼（2点）、京焼（48点）、楽焼（2点）、志戸呂焼（1点）、高原焼（1点）、隅田川焼（2点）、三楽園焼（1点）、渋谷焼（1点）、雪松文棗（三浦乾也）、浜松文棗（三浦乾也）、小砂焼（1点）、菊流水文手焙（井田吉六）、相馬焼（2点）、大森貝塚出土縄文土器（2点、内1点はレプリカ）

これを地域別に見ると、

九州（唐津、伊万里、高取、上野、八代、高田、小代、薩摩、対馬、柳原）、中国（備前、萩、岩国、楽山、布志名）、四国（高松、讃、志度、淡路）、近畿・東海（信楽、丹波、瀬戸、美濃、安東、瑞芝、偕楽園、男山、赤城、湊、赤膚、膳所、湖東、京、楽、志戸呂）、北陸（吸坂、九谷、大樋）、関東（高原、隅田川、三楽園、渋谷、小砂）となる。この中には後に柳が収集の対象としたものも含まれている。

32) 同書、P.23。

(3) モース・コレクション（民具）

1990年（平成2）に大阪の国立民族博物館で開かれた「モース・コレクション展」には1,400点をこえる品が展示された。その内容は実に多彩であり、図録³³⁾に写真の載っているものだけでも以下の通りである。

火吹き竹、はたき、ほうき、ちりとり、ぞうきん、しんしばり（伸子張り）、火打ち道具、十能、手あぶり、火ばち、こたつ、かまど（模型）、片手なべ、飯びつ、すりこぎ、杓子、包丁、まな板、金網、たわし、釜、蒸籠、急須、かつおぶし、かつおぶし削り、食器、水切り盆、茶碗、茶筌、ざる、なべ、手おけ、徳利、はかま、酒器、酒びん、イナゴの佃煮、羊羹の缶、海苔の缶、お茶の缶（未開封）、さとう菓子、干菓子、金平糖、トコロテン突き、煎茶道具（炉、急須）、枕、あんま器、旅行用の枕（そろばん、鏡などが組みこまれている）、燭台、携帯用の燭台、ローソク、行燈、提燈、蚊とり線香、かいろ、下駄、足袋、タバコ盆、キセル、タバコ入れ、うちわ、化粧道具、髪ゆい道具、お歯黒の道具、くし、こうがい、かんざし、しめなわ、こま、いろはカルタ、まり、百人一首、羽子板と羽根、雛人形、鯉のぼり、すごろく、紙人形、着せかえ人形、でんでん太鼓、軍配、相撲の化粧まわし、山車（模型）、神輿（模型）、神棚、盆灯籠、お習字帳、文机、硯箱、迷子札、絵馬、お札、縁起物の熊手、三味線、撥、鼓、太鼓、竹細工の花籠、柱飾り、看板（足袋屋、下駄屋、餅屋、玩具屋、鞆師、八百屋、絵具屋）、店舗（模型）、火事場の装束、消防用ポンプ、職人の手洗い桶、陶工のろくろ、陶工の道具、畳屋の道具、屋根屋の道具、大工の道具、木地師のろくろ、鍛冶屋のふいご、和船（模型）、漁具と釣りばり、魚師の蓑、等

まさに手当たり次第に集めたという印象を免れない。そして純然たる日用品も多く含まれている。これらは決して美的基準による収集とはいえず、博物館的関心によるものというべきであろう。しかし、「美しさ」はともかく、モー

33) 注14) 参照。

スがこれらの品に何らかの「良さ」を見たとはいえるであろう。

守屋³⁴⁾はいう。「モースが集めようとした〈もの〉は、かならずしも、こざっぱりした民芸品ではなかったのである。その結果、モースは〈もの〉に託して明治の日本人の息づかいを伝えてくれたのであった。³⁵⁾」

「モースが集めた〈もの〉には、まだ十分に江戸の香りが残っている。いまだ開花の波は、人々の生活にまではおよんでいなかったというべきなのかもしれない。私たちが、モース・コレクションに文明開化を期待すれば、それは必ずである。生活文化の変化は、年表が表現するあわただしい事件の連続とは違って、はるかに緩慢だったのである。

百年前、日本人たちの暮らしぶりは、いまよりはるかに貧しかったはずである。しかし、モースの集めた〈もの〉を見るかぎり、そこには、堅実な生活があったことがうかがえる。どれも、丹精こめて作りだされており、丹念に使いこまれている。おしゃれな〈もの〉もあれば、笑いをさそうユーモラスな〈もの〉もある。すくなくとも、貧しさを感じさせることはない。むしろ私たちは、そこに安定した生活文化を見ることができるのである。それは、それなりの豊かさといってもいい。³⁶⁾」

明治16年（1883）に日本を去って以降、モースは二度と来日しなかった。「日本の弟子たちがたびたび再訪をすすめても、首を横に振るばかりだった。モースが愛したのは、江戸時代の余韻を色濃く残していた日本であり、それが近代文明に侵食されていく姿を見るに耐えなかったからといわれる³⁷⁾。」この感覚は、まさに柳の民芸に対する関心と共通するものといえよう。

（4）フィラデルフィア万博

1876年（明治9）、フィアデルフィアにおいて「独立百年記念博覧会」（フィアデルフィア万博）が開催され、日本もこれに参加した。モースはここ

34) 注21) 参照。

35) 『モース・コレクション』、P.55。

36) 同書、P.58。

37) 同書、P.21。

で日本文化の展示品を目にして、啓示を受けたようである。彼はいう。

「フィラデルフィアで開催された『独立百年記念博覧会』における日本の陳列品は、われわれアメリカ人に対する一つの新しい啓示であった。そして、他の追従を許さぬあの展示法がなにしる魅惑的な猛攻撃を演じたものだから、完全に優勝を手中にした。日本熱がわれわれをしかと捉えたのは、まさしく、その時であった。³⁸⁾」

モースが来日した直接の動機は、先に記したように、腕足類の研究であった。しかし来日と同時に彼は、日本の生活文化に深い関心を寄せた。これはモースの好奇心の強さによるものであろうが、同時に来日前年の「フィラデルフィア体験」の影響も考えられる。

フィラデルフィア万博については、米國博覧會事務局より刊行された『米國博覧會報告書』³⁹⁾にその詳細が記されている。これによると日本からの出品分野は次の通りである。

第一大区 鉱業及び冶金術

鉱石鉱物、燃質鉱物、建築石材、石灰・セメント等、燃窯術用の鉱物、鉱水

第二大区 製造物

化学及び製薬術の成品、油及び蠟等、顔料及び色粉等、煉化石及び造家陶器、瓦類、土器石器及びフィアンス素焼器、食卓粧台及び装飾磁器、家什・漆器・木製器、卓上の家什、照明の装置、浴室廁場等、家内製造部分、植物粗造なる織物、綿糸及び其織物、染色木綿の織物、印花棉布、麻布、油布の床舗其他彩色布、繭生糸、紡造糸、無地絹巾、文様ある絹布、縮緬、天鵝絨及び手巾肩布等、綁條、組條、裁衣類、帽子・靴・手套其他の女装、刺繡及び衣服、家什等の装飾、人の服用する宝玉及び装飾、玩

38) 斎藤正二・藤本周一訳『日本人の住まい』（新装版）八坂書房、2004年、PP.3-4。

39) 明治9年（1876）刊、平成11年（1999）フジミ書房より復刻。

具，嬉戯物及び装飾用の小品，革製玩具・粧匣・行李・行囊，毛皮，文具，写字用紙，白冊，壁紙及び擬革紙等，武器，小刀・劍槍等，狩獵及び遊戯の具，薬剤，外科術の器具，歯医の器具，病傷者運載具，旗章，木工及び籃工

第三大区 教育及び知学

教育の初歩，植物・動物学，内外医術・芸術・画術，報告・総計等，文庫，書籍及び新聞紙等，精密機具・理学・星学の装置等，数数学具，秤量・尺度，楽器，土木・工作・堤防・水道等，風土・地図・海図，許多の遊戯，居家，貿易場及び商売の体裁，貨幣・記標等，政府諸分局の体裁・郵便法式・証券等

第四大区 美術

槌鍛槌起陽刻隠起の彫工物，木・象牙及び金属の彫鏤物，水色画，玻璃質料の描画，線画，写真，芸術の鑄工，石の雜嵌，金木嵌工物，美術の雜品

第五大区 機械（出品なし）

第六大区 農業

木材の裁片，染色及び柔革用木皮，温帯地方の果物，穀類，莢豆類，煙草及び茶，種物，介殻，魚皮，漁魚用具，海藻，皮及び毛皮・卵蠶等，動物産薫物，収蔵したる肉及び果物，粉澱粉等，糖及び舍利別，葡萄酒其他飲料，乾蒸餅菓子，木綿，大麻・苧麻等，繭及び生糸

第七大区 園芸

常青の樹木・灌木，草木宿根植物，球根及び円根植物，粧飾茂葉植物，羊齒草類，創見の植物，園庭の器具，飾用線工，園庭の作造⁴⁰⁾

40) 『米國博覽會報告書』第二（日本出品目録）に依る。

第五大区（機械）以外はすべての分野に出品していることが分る。このうちで「食卓粧台及び装飾磁器」の部門には、万吉、七宝、三河内、有田、清水、九谷、瀬戸、唐津、志野、織部、備前、信楽、伊賀、丹波、高取、萩、薩摩などの焼物が見られ、「家什・漆器・木製器」の部には、津軽、能代、若狭、琉球、会津、加賀などの漆器がある。⁴¹⁾ これらを目にすることにより、モースは日本の文化に対する関心を高めたのではないかと思われる。

(5) 『日本のすまい』

1886年（明治19）、『日本のすまい』⁴²⁾ が出版された。この書物は神社仏閣の類ではなく、通常の家屋のみを対象としている点が大なる特色である。

「残念ながら明治・大正の人々のなかで、身のまわりにあふれた庶民の家具、民具を資料として保存しておこうと考えた人は少なかった。不幸なことに、関東大震災や戦災によっても少なからぬものが失われた。したがって、わずか1世紀昔に祖先が使った品々の多くを、もう国内で見ることができない。その点に、モースの民具コレクション、陶器コレクションのはかりしれない重みがあるのだが、同じことは家屋についてもいえる。百年前、ありきたりの家々の姿を残しておこうとした人もまたまれだった。『日本のすまい』は、それを補う貴重な記録である。⁴³⁾」

『日本のすまい』の目次は以下の通りである。

第一章 家屋

都市及び村落の外見、家屋の概観、日本家屋の構造、組み立て構造、筋かい、用材の選び方、天井の構造、仕切り壁と外壁、倉の構造、日本の大工職人、大工道具および使用方法

第二章 家屋の形態

41) 同。

42) 注12) 参照。

43) 『モース・コレクション』、P23。

都市及び田舎の家屋，漁師の家屋，倉屋根の考察，板葺屋根，瓦葺屋根，石葺屋根，草葺屋根

第三章 家屋内部

概説，図面，畳，引戸，襖，引手，障子，床の間と違い棚，茶室，倉，天井，壁，欄間，窓，屏風と衝立，

第四章 家屋内部（つづき）

台所，床面，押入，階段，公衆浴場，浴槽，洗面および手洗所，手拭掛，寝床と枕，火鉢とタバコ盆，ろうそくと燭台，行燈と提燈，神棚，家の中の燕の巣，便所

第五章 入口と入り道

玄関と玄関の間，縁側と張り出縁，雨戸，戸袋，手水鉢，門，垣，塀

第六章 庭園

石碑，石燈籠，橋，四阿，池，飛石と敷石，盆栽と植木鉢，私庭園の眺め

第七章 雑事

井戸と給水，花，室内装飾，防火対策，洋式家屋，記念建造物の欠落

第八章 古代家屋

日本の古記録に見える家屋について

第九章 日本本土周辺の家屋

アイヌの家屋，八丈島民の家屋，琉球人の家屋，朝鮮人の家屋，中国人の家屋，むすび

モースの観察力の鋭さを示す一例として、「台所」の一節を見ると次の通りである。

「田舎の比較的つくりの良い家に関しては、日米双方とも台所の造りは大きく、広々としていることが多いので、採光、風通ともに申し分ない。したがって台所は、食事の準備や皿洗いの場面だけでなく食事を摂るところでもある。両国における都会の、普通の家屋の台所は暗くて狭く、かつ採光が悪い。だから、気持ちよく調理できるような場所ではまったくない。日本のこのような都会の家屋の場合、多様な日本間のなかで、台所は部屋としてはっきり区分しにくいのである。それは台所には、他の部屋を特徴づけているような簡素さとか明確な間仕切りとかがないことによる。台所は狭い張出し口（ポーチ）のようなものか差掛屋根だけの小屋のようなものが多い。天井があることはめつたにない。極は露出しているので煙で煤けてまっ黒になっている。煙の捌け口は天窓であるが、それは薄暗い台所内部の唯一の採光窓でもある。都会の家屋では、台所は通りに面した側にある場合が多い。その理由は、庭園が家の裏にあって、座敷がその庭園に面していることにある。また台所が通りに面していることは、魚菜の行商人などが台所へ出入りするのに都合なのである。台所が通りに面していないアメリカの場合だと、そのあたりのささやかな芝生にきまって肉屋の包装紙やその日の楽しい食事の回想物が一面に散らばってしまうということになる。田舎では台所は、一般的に家の一方の端にあって、張出し表口のような形に広がったものになっているのが普通である。そしてここに、桶（タブ）、手桶（バケツ）などが置かれ、冬期間の薪が勝手に積み蓄えられている。宿屋、大きな田舎屋、その他多くの都会の比較的大きな茶屋では、しきたりとして高い床面の一部を割いて幅狭い土間を残している。その地面は堅く踏みつけられている。この部分が、表通りから家の内奥部、さらに裏庭への通路ともなっている。これによって、履物を脱がずに奥座敷にまで行くことができる。担ぎ人夫や使用人は客の荷物を直接奥の間に運び込む。旅籠では、駕籠を奥の間まで運び入れることができるのでいっそうプライベートが守られる。客は自分が泊まる部屋の入口で駕籠を降りればよいからである。こ

の通路を横切るのに板（プランク）を差し掛けたり適当な台（プラット・ホーム）を置いたりするが、それは宿泊客が素足か足袋ばきままで屋内の各所へ行けるようにするためである。宿屋では、帳場、納戸、台所などがその通路の片側に並んでいる。納戸では、太い樫で支えられた草葺屋根の下で、赤ん坊の世話や裁縫、その他さまざまの家事が行われる。屋根は台所の竈の煙で黒く煤け、それに負けないくらいに煤けたくもの巣が、花網のように掛かっている、炉の火がパツと赤く燃え上がると一種不気味な様相を呈する。これは、アイヌの家のように、とくに炉が床の中央に位置する北日本の田舎家に見られることである。田舎屋でも比較的つくりの良い家の台所は広くゆったりしている。井戸は手近な便利の良いところにあるのが普通で、台所内にある場合も少なくない。日本の家では、台所で使われる水の量は莫大なものである。したがって、井戸が屋外にある場合、井戸に接して函樋（トロフ）をしつらえてあり、井戸から汲み上げた水をここに流し入れる。水はそこから竹の管を通して台所内に置いた大型貯水槽に達するようになっていく。⁴⁴⁾

単に外観のみでなく、内部の細かい部分にまで観察の眼が行き届いている。この鋭さは柳の民芸美に対する直観の鋭さとは別種のものである。しかし、日本の生活文化の本質（深層）を見抜いた点において、両者には相通じるものがあると考えることは十分可能であろう。

先にふれた佐原氏の講演では、前記の部分に続いて次のように述べられている。

「モールズさんは日本の民家を研究します。その報告書は『日本のすまい、内と外⁴⁵⁾』という題で翻訳が出ています。この本のなかで、彼はごく中流の一般の民衆をとりあげています。そしてそこで使われている家具や道具類、便所、下駄箱にいたるまでを記述しております。日本の建築といえば神社があり、お寺の建築がある。あるいは大名屋敷やお城がありますが、彼はそういうものを研究のテーマとしては選ばなかったのです。

44) 『日本人の住まい』（新装版）、PP.199-200。

45) 上田篤・加藤晃規・柳美代子訳、鹿島出版会、1979年。

モールスのほかにも、外国の人で日本の建築を研究した人はたくさんいます。たとえばドイツのブルーノ・タウト⁴⁶⁾は桂離宮の研究で有名です。モールスの研究は、そういう研究ときわめて対照的であります。⁴⁷⁾」

モースと柳は、見る眼は違っていながらも、共に「下手」の世界に注目した点で共通のものをもつといえよう。

46) Bruno Taut (1880-1938)。

47) 『モースの贈り物』, PP.212-213。